

# 海軍

## 一 海軍軍属の

### 敗戦従軍記録

京都府 矢野 美三雄

昭和十七（一九四二）年一月初め、当時私は二十六歳であった。友の多くは既に支那大陸で護国の鬼と散華しており、私も早晚召集され鬼籍に入ると思っていた。戦局の拡大に伴い、私も安閑としておられぬ、この際、私にとっての回大の事業とは何かと苦慮し、たまたま街頭の易者の前に立った。彼が言うには「蛟竜地にひそみて出でず」今こそ奮起のときなりと卦がでたので、私は「チャンス到来なり」と思った。

昭和十年に中学を卒業し、勉強が嫌いなので、官立公立はおろか私立の専門学校へも進学したくなくて、当時の非常時の波に乗り、知人の紹介で海軍工廠へ工員として採用された。

流れ去ったことを如何に悔やんでも取り返しは出来ぬが、私は井の中の蛙で、しかも農家の三男坊育ちで呑気に暮らし、偉い人と言えは学校の先生などで、海軍の士官も技師も知らなかったのに比べて、小学校の同級生は父が師範学校出の高等官の小学校長で、優秀で、頼山陽のような刻苦勉励型であった。

当時若人の憧れの的は難関の第三高等学校、京都帝大を卒え、海軍工廠の技術科士官となり短剣をつり、自動車での登下庁であった。

その頃私は七年近く勤めていた工廠会計部の主計少

佐の勧めもあって、南方の特設海軍經理部へ軍属志願することとなった。この上司は、私が工廠の青年団活動をしている時にいろいろ指導していただいていたので、特に目をかけてもらっていたのではないかと思う。

当時日本は勝ち戦で旗色がよかったので、採用の条件待遇もなかなか良く、軍属とはいえ拳銃を貸与され、戦地からは年一回ぐらいは飛行機で内地出張もするということであった。

要するに軍人で戦死するも、軍属の一死報国も同じであると感じ、同年二月十一日、当時の紀元節の佳き日に鹿島立ちした。

郷土の氏神に身を清めて詣で「武運長久」を祈願し、肉親、親戚、知人に送られてなつかしの故郷の後にしたが、母は私が戦争に行くのを聞いて二十日余りは床に伏し、十一日の出発日も悲しい別れで、玄関まで見送ってくれたのが最後で今生の別れとなった。

昭和二十一年六月に帰還して知ったのであるが、母は昭和十九年九月末、私が大空襲を受け「今日は最後

か」と観念した時に、稲刈りをしていた田圃で生来の心臓の弱さに暑気が加わり、農婦として田圃で殉職したのである。

#### 戦地へ向かう

昭和十七年二月十二日、呉軍需部に設置の第百二海軍經理部設立事務所へ出頭した。私は海軍各庁よりの転勤者のこと故、經理部の中枢指導的立場となり、従って給与の面も従来工員で日給であったが、雇員に身分変更され二十八日分の月給となった。そして戦時増俸も本給の十五割の破格で、合算すれば工廠工員最上級の工長（部内限判任官待遇）と同じぐらいであった。いかに命を的に戦地に赴くのであるとはいえ有り難く思った。

呉に約二週間滞在し、人事や物品の整理に忙しく、二月二十五日基地を出港した。乗船は海軍徴用船「東京丸」で、景気よく進攻一路の戦況下とはいえ、軍船で海軍退役の老大佐が指揮官、分隊士の兵曹長、下士官、兵十人はどの警乗員で、大砲も偽装の大砲で心細いものであった。便乗員はいずれも蘭領へ行く軍需部

燃料廠、病院等の要員であった。

私の身分は雇員であるから兵並で、船倉の底深い居住区を与えられ、文字通りの蒸し風呂のような暑さで終日喘ぎつつの南下であった。

途中ミンダナオ島のダバオに上陸し、生まれて初めて南洋の土を踏み、バナナやパイアをたらふく食べた。

さらにセレベス島のマカッサルに入港し、先着の経理部支部に一週間仮入隊した。戦禍を受けているとはいえ蘭領東印度の状況を垣間見た。ここではオランダの生活ぶりがうかがえ、敵国の文化的生活に感心したものである。

マカッサル発三月二十三日、「興安丸」に経理部のみ便乗し、スラバヤ沖を通過し、二十五日に最終目的地バリクパバンに到着した。途中潜水艦や飛行機の攻撃もなく安着したのは幸いであった。

「油の一滴は血の一滴より尊し」と日本で渴望されていた石油の宝の山の当地への進出こそは、日本にとっては最高に幸運であった。

#### 極楽の生活

陸軍に比べれば海軍は板子一枚下は地獄の海上戦闘であるので、給与はいたって贅沢である。もとより蓮托生で、海没すれば艦長も一兵卒も皆泳がなくてはならないので一面仲も良いようであった。

私の役所は海軍の金品を扱う補給の元締であったから、瀬戸物の食器で大変なご馳走であった。そして私は先任雇員なる故、支部長の主計中佐と同じ食堂で末席で食事をした。

内地ではだんだん食糧事情が悪化して、配給米や物資の統制があり、しかも軍優先なる故、魚類や肉類も入手困難と留守家族より知らせが来ていた。

甘味品も何分にも砂糖の宝庫である。ジャワ島が海峽をへだてた指呼の間で、ドンゴロスの袋詰めで移入された物が倉庫にわんさとあり、袋を破って流れていた。

甘党の私も砂糖製品の中でも相当高級品のチョコレートや乳製品、さらに干しぶどうも余る程あって、今日であればとくに糖尿病になっていたであろう

が、年も若く運動も適当にしていたのでカロリーの消耗よろしきを得て健康であった。

経理部の業務の一端に保養施設もあったので、そよ風吹く海辺に瀟洒なレストランを設けており、軍人軍属やたまさか上陸してくる船員の最高の憩いの場にもなった。戦利品の綿布もたくさんあり、経理部直営の縫製工場で身体に合った見る目も涼しい防暑服を作り、紳士面して市中を闊歩している者もいた。

宿舎は高床の鏝戸で熱帯に向くように出来ていた。ここはオランダの統治当時、BPM石油の高級社員の住宅で冷蔵庫、扇風機、シャワーも設備されていた。

空気も内地と違って乾燥しておりさっぱりしていた。それに日に一度ぐらいいはスコールがあつて、体温の調節もよく出来、衣食住の生活条件は満点であつた。

#### 初空襲

昭和十七年三月、上陸以来平穩無事であつた当地も、同年六月五日、太平洋のミッドウェー海戦の敗戦によりおいおい形勢は悪くなり、昭和十八年八月十二

日、初空襲を受けた。

同僚の中で大陸で陸軍兵として転戦した者が丁度当直勤務であつたので「敵襲、敵襲」と連呼して急を告げた。私は連夜のビール漬けで夢路に入らんとしていた矢先で、取るものもとらず宿舎前の敵の造つた防空壕へ逃げこんだ。空襲の恐ろしさや威力を知らぬ私らは壕の外に出て、敵機を撃墜すべく防空砲台から撃ち上げられる防空砲火に拍手を送り、両国の川開きの花火見物のようであつた。が、翌日の朝礼に支部長より「今後空襲の時は絶対に頭を出すな。鍋の破片のような味方の砲弾で戦死するから」と厳しく訓示された。

このことは如何に非戦闘員の軍属でも戦いでは軍人軍属の区別あるはずはなく、敵も無差別であるということを経験としていやという程経験したのである。

#### 経理部の編成と任務

支部長は主計大佐で、第百二燃料廠会計部長兼務、副官的存在の主計少佐（海経出身）、在勤最後の頃は主計大尉（短期現役）二人が日常業務を管理し、その

部下は主計兵曹二人、職員は書記二人、雇員の理事生、製糧士の菓子職人、昼職人、理髪師、写真屋、商社員を学歴経歴に応じて奏任官待遇、判任官待遇とあり、総勢五十人ぐらいであった。非戦闘部隊とはいえなかなか責任のある補給兵站の役所で、金も物も十分にあり、戦闘員から見れば羨望の的の存在で花形であった。

私の分担は金銭会計で、膨大な臨時軍事費の海軍予算を本省経理局員を主任出納官吏とし、鎮守府警備府艦隊や特設海軍経理部等の主計科士官を分任出納官吏として経費の分割をなし、軍人軍属の俸給給料の支払や軍需品、食糧の購入、施設の建設費等の支払いなど多岐多様であった。それと同時に各庁の会計の指導監督検査も行うなどそれこそ会計の元締であった。

昭和十七年九月より始まった連合軍反攻作戦で、ガダルカナル島撤退より昭和二十年まで玉砕が相次ぎ、当地も連日の定期便の空爆で心細く感じたが、志を立てて従軍して来たのであり、軍歌にも「手柄立てずに死なうるか」とあったし、当時は聖戦と呼称してお

り、私も一死以て君国に報ぜんとの重大な決意であった。私は生来の悪筆であったが、筆まめに『私本戦時日記』を書いていた。

満二年間の空襲に対する撃退戦果はほとんどなく、被害のみであったが、日本軍独得のデマ放送であった軍艦マーチで報ぜられるニュースを表面は信じざるを得なかった。私らは傍受禁止のニューデリー放送を密かに聞いたが、敵側の放送はまず「こちらはニューデリーであります、日本軍部は天皇陛下にうそを申し上げています」とあった。大本営は被害は連合軍の方でありと自国の負を敵に置き換えていたのであるが、戦後あれこれと連合軍の書物を見て啞然とした。

最初のうちは帳簿を鞆に入れて防空壕へ運び、空襲解除と共に事務室へ持ち帰り、小砂の入った帳簿をなんとか整理していた。

私らの庁舎は海辺にあるため五〇〇キロ爆弾などが落下して来ると直径二〇メートルほどの穴があき、見る間に海水が湧いてくるという有り様で、空襲の科学と湧水の自然に驚いたものである。

連日の空襲や夜間の爆撃で神経戦になり、寝不足も手伝ってだんだん衰弱してきた。

#### 来攻

昭和二十年六月十五日に、豪軍第七師団が巡洋艦数隻に乗艦来攻して来た。最高指揮官鎌田道章海軍中将より「千早二号作戦」が発令された。

私は暑い日中庁舎の前に穴を掘り全員で秘密文書の焼却を行った。苦力を使って庁舎前や横に建設された防空壕も、敵の徹底的な爆撃と艦隊のズシンズシンと腹にこたえる艦砲射撃では何とも致し方なく、運上天に任す状態で、背後の丘陵では石油タンクが爆破され赤い炎が上がっていた。

日本が優勢な時には、戦力の補助として原住民を兵補の名目で使っていたが、だんだん不利になると原住民も日本敗戦と読んで、手の平をかえすように命令を聞かず、それどころか利敵行動に出て、爆撃の際に火矢を上げ重油タンクの所在を示すようになった。

獐猛<sup>どうちゆう</sup>で首狩の風習のあるダイヤック族などは毒矢を使って日本軍を襲った。インドネシアはオランダに占

領され統治されていた時はオランダに従い、日本が勝ったら日本に尾を振る、それは弱い者の心理で致し方ないと思った。

#### 反抗する下士官

海軍軍人確保上、専門学校以上出身の優秀な人材を二年現役主計科士官として任用し、不足がちな下級主計科士官の補充としていたのであるが、一方、兵からたたき上げた主計科下士官が上官の二年現役を軽視して命令に服さず、軍規のゆるみをししばしば目撃した。

それも無理からぬことである。知識学問は専門的に十分受けているが実務は経験浅く、如何に主計科とはいえ軍人であるから、軍人の基礎訓練は館山の砲術学校で三カ月間受けた、いわば促成栽培の盆栽である。

一方、下士官は海兵団で軍人精神注入の直心棒で朝な夕なにしごかれ、どやされ、部隊へ入ってからは、主計科は炊事の杓子で叩かれるという、訓練に雲泥の差がある。温室育ちは風雨に弱く、野草は少々の大風で倒れるものではないのだということを実感した。

私は中学時代に軍隊宿泊五日ほどで見聞したが、軍

隊の私的制裁がはげしく、ために不具になったり、甚だしきは自殺する者や逃亡者も出るとあった。私は学業も芳しくなく学校教練もお情けで合格させてもらい、幸いにも現役を逃れ召集忌避で軍属を志願してきただのであるから、軍人社会の矛盾や凄絶さを論ずる資格はないと思っている。

#### 転進

戦機熟したと察した私ら等は、公文書の処分と共に、私物の整理、特に書物の片付けをしなくてはならなくなった。前述の『私本戦時日記』も残念ながら焼却せざるを得なくなった。

今にして思えば、あれがあれば立派な資料として記録文章の記述が出来たのになあ、あれこそは金銭にかえられぬものであったと思う。

敵上陸近しの報で山へ逃げることとなったが、長袖のいわば平家の公達のような経理部軍属は、その時にはまだ健在であったトラックに寝具を積み込み、衣料もたくさん持って御公家さんの都落ちのようであった。初めのうちは、先着の者や施設隊が雨露をしのぐ

草葺きの仮の宿を造ってしてくれたのでそこへ入った。

私ら経理部は燃料廠会計部と共に根拠地隊主計料を主力とする主計隊となった。私は軍票を苦力に担わせ山中を逃げた。武装は、経理部の特典で手に入れた立派な軍刀と、内地より父が大枚をはたいて買ってくれた昭和刀と、二振り持っていた。山道は厳しく燃料廠造修部製の穂先三〇センチほどの槍を杖にして歩いた。

一方、敵豪軍は陸戦専門の精鋭陸軍である。陸揚げした戦車の後ろにかくれ、自動小銃を腰だめにして「こわい、こわい」と日本語をしゃべり、ガムを噛みつつ突進して来た。

我が軍は海に投ずべき爆雷を、敵の進行する道に穴を掘って埋め、導火線を引き、近くの蛸つぼに決死の兵が「よき敵御参なれ」と手ぐすね引いて待っていた。

それでも戦果は少しはあったようで、現地進出の朝日系のボルネオ新聞のニュースで、敵トラックを爆破

して四十人ほどをやつつけたと見た。新聞発行も大變で、防空壕の中へ石油で回す輪転機を据えたり、限られた古紙で土気を高揚すべく針小棒大の記事もあつたであろうが、それでも私らは大喜びであつた。

#### 複雑な混成庁舎

昭和十八年、私は第二南遣艦隊所屬の海軍囑託（海軍部内限判任官待遇）であつた。雇員の先任で海軍部内経歴も十年近くになり、本官の海軍書記任用の申請書を本省へ進達するのに艦船は大部分沈没し、制空権も奪われていたその頃である。一文官の人事等論外で致し方なく、優遇措置で部内限判任官待遇が与えられたが、昭和二十年には協定により陸軍召集となつた。

結局は勤務や給与は従来通りで、海軍規律に従う勤務生活であつた。総員起こし、勤務時間、昼寝の習慣別科、午後外出、夜の巡検、最大関心事の給与なども変わらなかつた。ただ一つ異なつた現象は、私の部下であつた雇員が陸軍に召集のお陰で海軍の防暑假に陸軍下士官の階級章をつけ軍刀を下げ始めたことであつた。

陸軍の兵籍がない者は私も含め全員二等兵であるはずだが、階級章は交付されなかつたし、新兵教育も一日も実施されなかつた。同じ庁舎内で机を並べる者の間に、このような階級差が出てくるのはどうもやり難い。陸軍経験者が海軍で勤務するのに陸軍の階級章まで持ってきたとは……。今更陸軍の階級章をベタベタとつけたとてどうなるのか。戦局が好転すると思つてゐるのか。経理部職員の中には三十歳代の者も多く、幹候出身の陸軍将校もいたようだ。

それどころか、現に専門学校出身で判任文官として海軍に入り、片や海軍の二年現役の主計科士官として堂々と同学歴者を指揮命令している。誠に「軍隊は運隊なり」は間違いない。かの判任文官は誰の許可を得たのか勝手に階級旗を手に入れ、自動車に乗るのに高等文官の白旗を掲げていたが、越権もここまでくれば論外で軍律違反、官吏の風上にもおけぬ輩である。貧すれば鈍するというのが、厳格で命令絶対服従の軍隊で抗命が公然とあり官職詐称も行われた。

沖縄も陥落し、戦局は日本に極めて不利に展開して



いるとはいえ、いよいよ敗戦の末期症状が表れたと思つた。

それでも動力の油がなくては戦いにならぬ、今に連合艦隊が当地を見捨てることなく救いに来るであろうと淡い期待を話し合つた。

潤いを失つた男性たち

戦中の海軍の流行歌に

「腰の軍刀にすがりつき、つれて行かんせソロモンへ、つれて行くのは安けれど、女は乗せないいく

さ船」

とあつたが、軍艦でなく役所であつた経理部には、当時南進女性と持てはやされたうら若い二十歳前後の乙女が数人勤めていた。

遠くて近いは男女の仲とあるが、その乙女らと若い男子職員との間に美しいロマンスも二、三生まれたのは当然であろう。されど戦況刻々不利になり、可憐な乙女達にも引揚げの命令が出て、昭和十九年九月三日、病院船「氷川丸」で帰国することとなつた。

妹のように可愛がつてきた乙女達、潤いを与えてく

れた若い女性を送る荒くれ男達は、沖に遠ざかる船に万感の思いを込めて日の丸を振つて、前途の無事安着を声を限り叫んだ。男達の願いも叶い、海も空も敵が制し、海中も敵潜が鵜の目鷹の目であつたのに、無事内地にたどりついたと後日聞き、皆喜びあつたものである。

負け戦の苦しみ

空は陽光をさえぎるほどの爆撃機や戦闘機、素人の私は詳らかに知る由もないが、高度を飛んでいるので友軍の高射砲は届かない。敵軍は猛烈な威力のある爆弾を投下してさつと引き揚げて行く。一波二波と物量に心配ない敵軍、私ら主計隊は空襲の間は防空壕へ避難するのが一番安全で、軽拳妄動は禁物である。

それでも烹炊所は兵糧作りであるから止めるわけには行かぬ。壕に近く水に便利な所に設置された釜で炊飯をしていた。陸戦たけなわになってからは煙を出さぬ椰子の皮、コブラを燃料とした。最初のうちはそんな知恵もなく丸出しで敵射撃の目標となつた。空にはトンボと呼ばれる観測機がすぐ軍艦に所在を通報す

る。そして腹にこたえる艦砲射撃はよく当たった。

「ズシン、ズシン」と飛来する砲弾は山砕け地裂けるように、この世の終わりがかと思怖のみであった。

烹炊員の一員で経理部の製糧士が、その艦砲の餌食となり肉片も残さず散華した。故郷には妻子もあつたであろうに。彼の死が同僚の戦死第一号である。

烹炊所で作つた握り飯を野戦の第一線へ届けるのも主計隊の重要な任務である。私ら先任は危ない仕事は後輩に命じて御身御大切と壕に隠れていた。配達を命ぜられた後輩は二十五歳ぐらいで、陸軍現役を終え海軍軍属として従軍して来たのである。

戦後、私らの戦友会が十回前後あつたが、彼は遠い長野市在任で高血圧の宿痾持ちで、一回も出席していない。先年私は彼を出身地に訪ねたところ、戦後五十年余り積もる話に時の経つのも忘れた。彼は真言宗の寺の住職で夫人と二人暮らし、男児三人も立派に成人し、寺の周辺の畑を老夫婦で耕し、何不自由ない生活ぶりであつた。彼は武運に恵まれて帰還し、幸福そのものであつた。

私は敵来攻前に陸戦隊の下士官と尺八の趣味を通じ知り合つた。彼は尺八の名手で職業軍人で、雄々しさの中に雅やかさを備え、武骨一辺倒でなく奥ゆかしい人物であつた。私らは発令された「千早二号作戦」で引き下りの戦法で、バリクババンからサマリンドの奥地へ逃げ行くのであつたが、かの兵曹は陸戦の第一線で不幸にも悪性マラリアとアメーバ赤痢に罹り、看護してくれる者としてなく、気の毒にも路傍に伏していたのである。そして熱病と下痢で見るとかげもないほどやせこけ、虫の息で「水をくれ、水を」と懇願してゐた。私も水筒に少しはあつたがそれとても自分にとつては大切な命水である。これを彼にやれば自分が倒れる、心を鬼にして「後から救援隊が来るからしばらく頑張り」と励ましその場を去つた。彼はそこでのたれ死にしたように、末期で水を求めていたのであつたと思ひ、いまだにその姿が脳裏に焼き付いて忘れられない。悲惨な惨敗の戦場は身の毛がよだつようであつた。

第一線から腕に敵弾を受け上肢をぶらりとさせ、枯

れ枝を杖にして引き下って来た一兵上に、小隊長は軍刀を手に「なぜ逃げて来た、ぶった切るぞ」と威嚇叱咤していた。木かげに設けられた仮包帯所では負傷兵の弾ぬきが麻酔なしで行われた。「痛い、痛い」と泣き叫ぶのを軍医官は「辛抱せい、死にたいか」と荒療治していた。

戦友の一人は山の中の苦力小屋で疲れをいやすべく、しばらく避難していたが、好日標となり機銃掃射を受け、小屋もろとも蜂の巣のようになり相果てた。

私も連絡のため、歩行中、敵機に見つかり旋回に旋回を重ねていたが、今撃ってくるか、もう駄目かと寿命の縮む思いであった。

また、昼なお暗い熱帯林での生活で、山蛭に氣をつけて水浴びをしていた時に機銃掃射を受け、運良くそこにあった大木の周りをぐるぐる回り難を逃れたが、ああ今日はまだ駄目かと思つたことが何回もあった。

太陽に当たる時間がない「もぐら」のような戦闘で下痢症状になった。ああ万事休す、残念、アマーバ赤痢にとりつかれたかと思つたが、ちょうどその時、老

衛生大尉と行動を共にしていたのが幸運であった。有り難や地獄で仏とお尋ねすると「それは身体の腹部が冷えているからだ」と教えていただき、養生としては空襲の合間努めて日光浴をするようにと言われた。その通りにしたら二、三日で快方に向かった。

連日の行軍の疲れと、食糧も缶詰が多く野菜不足となり足がだるく脚気のようなになった。お供をしていた上司の支部長より、野草でいいからよく乾かして艾もぐさをつくり、木の枝で代用線香を作り、足の三里に灸をせよと親切に指導していただいた。溺れる者は藁をも掴むのたとえ通り、効果てきめん、その後終戦まで行軍し得たのである。

幸いにも私は立派な上司や専門家の方々の指導助言にて生き延び得たと、戦後五十四年経た今も感謝している。

#### 戦中戦後のことなど

腹が減っては戦は出来ぬとは、古今東西を通じての名言である。日本が敗れた一因は補給をおろそかにしたことである。戦っている時は何と言っても兵糧が第

一である。

海軍では糧食野菜を戦地で自給自足するために、軍需部の下部に食糧生産隊が組織され、農林学校出身の若人を集め、主計科の二年現役士官が隊長となり補給の任に当たっていた。

戦時中に不心得な軍人軍属が役得を笠に着て不当に物資を横流しして、収賄し、その汚れたお金を郵便貯金しているとの噂が流れたので、私は軍法会議法務官と同行し各庁各隊を捜査に回った。その際、生産隊で出された親指程の大きさの甘藷の美味しかったことを今でも思い出す。

戦中の戦傷戦病は言うまでもないが、敗戦後収容所生活でも、最後は医者や薬で体調を整え栄養のある食品を摂る知識や方法が大切であると知った。

なんとと言っても内地帰還の希望を心に抱き、絶対故国へ帰り日本再建に努力したいという不撓不屈の精神と、医学のお陰で、故郷の土が踏めたのであるとこの頃改めて思っている。